
妄想ウサギSIDE

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想ウサギSIDE

【ZINE】

Z0180Z

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

脳内ストックされたまま、途中まで書いて放置、そんな小ネタだらけなお話の数々。

続くかもしれないし続かないかもしれない。

超不定期投稿。

少年ウサギ・そのいち

僕はウサギ。

耳がついて尻尾が丸くて白いやつじゃない。

名前がウサギなだけで、生物学上は人間の男だ。

名前の割りには整った顔とさらさらの黒髪だつたりする。

僕は喧嘩が嫌いだけれど、何故かいつもふっかけられる。

何故だろうかと何度も考えてみたけれど、そのところはいまいちわからない。

そういうふう考えてこるついで、やつぱりまた、ふっかけられた。

「おに田中、お前いけすかねえんだよ。」

「どうして？」

「ウサギとかいう名前のくせして、眼鏡なんか掛けやがって！」

「目が悪いからね。ああ、君も掛けたいのかな？けど、眼鏡掛けたからって誰でも賢くて美しくなれるわけじゃないんだよ、郷山田くん。」

ああ、郷山田くんが憤慨してしまった。的を射た的確な発言をしただけなのに。

「ふざけんなー。」

ひらひ。

突進してきた彼を華麗に避けて、僕は胸ポケットから赤いハンカチを取り出す。

喧嘩は嫌いだ。

だから僕は、決して闘わない。

避けて避けて避けまくる。

闘牛士の如く、赤いハンカチをひらひらとさせながら。

「君はがさつだなあ。美しくないよ。ああ今のは見た目のことじやないからね。」

「う、うるせえ！ハンカチなんかで闘いやがって！だからいけすかねえんだよ！」

「どうしてわからないのかな。」

ひらり。

赤い色に興奮気味の彼を挑発し、僕はまた華麗に避けて見せる。ああ虚しい。

お師匠様は、こんなことのために僕にハンカチ技を教えたわけではないというのに。

切なさに胸を締め付けられる思いで、今日も僕は、ハンカチと共に舞う。

少年ウサギ・それに

世の中は常に騒がしい。

いつも通りアイロン掛けしたハンカチを胸ポケットにしまって、一歩づきを出た途端、そんなことを思った。

「お前の美形面に腹が立つんじゃ！」

「立つんじゃ！って言われても…って、イタツ。」

斜め向かいの玄関先で、二コチン中毒女…基い、ヒナコさんが、既に何人かさえわからしかねる美形、ルビーさんを足蹴にしていた。

「イタツとか可愛い子ぶつてんな！男の癖に…男で美形で外人さんか！？え、このやろ！」

「痛いよヒナコさん…男で美形で外人つて俺の所為じやないし…。」

最もな台詞を吐いたルビーさんに、心中密かに頷いて同情した。けれど、”渡辺ヒナコ”は大和民族まるわからりな名前だとしても”車谷ルビー”ではそう言われても仕方ない気がしなくもない。そう言う僕も”田中ウサギ”だからか、ヒナコさんには目を付けられている。

至極、迷惑極まりない話だ。

「…早々に立ち去りやつ。」

小さく呟いて、しかし、学校へ行くためには通りがかるを得なこそこの足早に見てみぬ振りでやり過い」そうとした。

が。

「天誅、ハンカチ少年！」

あられもない台詞と共に、ドロップキックが跳んできた。
ひらりと躲し、颯爽とハンカチを取り出す。

「ヒナコさんも憲りないですね。」
「何をう!…やるか、ハンカチ!」
「望むところです。」
「え、ヒナコさん、俺は?」
「黙つとけ美形!」
「いつも思つけど…ヒナコさんのそれ、誉めてるの?」

がつと小気味よい音がして、ヒナコさんの墜落としがルビーさんに綺麗に決まった。

「こぞり、尋常に勝負!」

地を蹴るヒナ「さん。

揺らめくは、くわえ煙草の煙とハンカチ。

そんな僕の、いつもの朝。

少年ウサギ・そのさん

僕のハンカチーフが盗まれた。

大変困ったことだが、困ったことはこれだけでなく。

「…あの人だな。」

犯人の目星がいとも容易く付いてしまうことだった。

面倒だとは思えど、あれは代々田中家に伝わり祖父から受け継いだ由緒正しき赤いハンカチーフ。

このままにしておく訳にはいかないし、このままにしておいたとしても、どうせあの人はドアを蹴倒し、喚き散らしながらうちにやって来るだろう。

「何て面倒くさい人なんだ。」

そう眩いでから、僕は溜め息混じりに斜め向かいのあの人々の家へと足を運んだ。

「あれーどうしたのさハンカチ少年。」

控えめにノックをしてドアを開ければ、くわえ煙草で面倒くさい人

ヒナコちゃんが、やる気なくソファにじだりけながらひらついた。

「相変わらず」「チキン中毒ですね。」

「お前はんち来て第一声がそれか。」

最もな「メントは敢えてスルーする。

「あれを返してくださいませんか。」

「あれ? どれ?」

「そんなすつとぼけたボケはいりません。」

「ボケてねえよーあたしはまだまだピッヂピチだ!」

毎度のことながら、どうも話が噛み合わない。

ヒナコさんの脳細胞は、果たしてちゃんと機能しているのだろうか。余計なお世話かもしれないが、生活費はどこから出しているのだろう。

そう言えば、ヒナコちゃんは働いているのだろうか。

「あんた、一体何しにきたつてのよ。」

だらだらしながらだらだら話すヒナコさんを一瞥して、こんなどうしようもない人間を雇うお人好しがこの世にいるのだろうかと、どうでもいいことを考えてしまった。

「あの、生活費は一体どーから…」

思わず口から思考が漏れたとき。

「あ、ウーチャんじゃないかー。どうしたの？」

「ウーチャんはやめてください。ていうか、またいたんですねかルビーさん。」

ヒナコさんのパシリとしての人生に疑問を持つていらないだろうルビーさんが、キッチンからひょいと現れた。

「ウーチャんも食べる？ 今日のお昼はチャーハンだよ。」

「チャーハンはどうでも…あ。」

「あ？」

フリフリのHプロンを身に付けたやたらと美形な彼が布巾代わりに

手を拭いている。それ。

真っ赤で高貴なを漂わす。それは。

「…貴方でしたか。」

「チャーハンは？」

「…」ただきます。」

僕のハンカチで手を拭く満面笑顔のルビーさん。それ以上は、何も言つことが出来なかつた。

「あんた昼飯たかりに來たのかよ。」

「結果的にそうなつたままでですが。」

後日。

ルビーさん宅の物干しにはためくそれを、そつと取りに行つたことは言つまでもない。

「ルビーさんには…言えないな。」

彼の憂うべく人生とこれからを考えながら、只、遠い目でそつ狂い
た。

ペリカーズム 単位は“柱”です

「今日もいい天気だ。」

煎れたての緑茶片手に、うーんと伸びをして、澄んだ青空に目を細めた。

うんうん、とても清々しく素敵な朝だと思つ。

大満足。

ちーちゃん（彼女）は今頃、ラクダに跨がつて悠々と出勤中なんだろつなかとか、これまた清々しく、頬を緩めて考えてたりした。

僕はペリカ・ココ・町村。

オレンジの髪にグレーの瞳をしていて、自分でも正直、何人なのかも既にわからない。

町外れのこの村で、占い師をやつていたりする。

最近の僕の興味は、お隣に住んでる眼鏡少年と、斜め向かいの二コチン中毒な彼女と、そのお隣の少しちつ氣があると思われる美形な彼だ。

「ヒナコちゃん。」

朝っぱらから堂々と二コチン中毒な彼女、渡辺ヒナコさん宅に了承なく乗り込んでいくMな彼、車谷ルビーくんの姿が見えた。
ああ、毎度のこととは言え、僕はわくわく…いや、はらはらしてしまつ。

「ルビーーてめー！あたしはまだ寝てたんだよー。」

「イタツー… 酷いよ、ヒナコさん…。」

外にまで響き渡るガシャーンっという音と、打たれ強いのかんまりこたえてなわざうなルビーーくんのちょっと氣の抜けた声。

「今日も平和だなあ。」

呟いて緑茶を見れば、茶柱が立っていた。

「柱つて、神様を数える単位だよね。」

てことは、僕の緑茶に一柱。
神様が降りたつてことで。

「いいことあるかなあ、ちーちゃん。」

「え、僕は田中ウサギですけど。」

ちょうど前を通り掛かったお隣さんに、怪訝な顔でそう言われてしまった。

忙しいんです。

大学事務つてのはまあ、意外や意外、忙しいものでして、休講のお知らせを出してみたり、警告書を発行してみたり、経理のお手伝いしてみたり、ときにはお茶出してみたり。

「あかりちゃん。」

ああ、忙しい忙しい。

「ねえ、あかりさんつてば。

忙しい忙しい、忙しいつたらない。

「あかりちゃんって、甘い。」

「忙しいつつつてんじや！クソガキが！」

につこにつこと笑顔を浮かべ、ついでにキラキラエフェクトで眩しさを撒き散らす男に、罵声を投げつけてやつた。

どうだ、参ったかこの野郎！

「忙しそうでんじゃーって…今、初めて聞いたけど?」

「モノローグで散々言つたんだよ!」

「わかれよ、そのぐらー!」

「わかつて、わかつてよ、お願ひだから!」

「あたしは今、仕事中なんですよ?」

「お氣楽極楽大学生に構つてやつてる暇はないんですよ。」

「だつてあたしは、社会人だから!」

「そんな訳で、早く講義に戻りなさい。」

「最もらしい理由で、スマートに返すあたし。」

「流石は社会人!」

「学生さんとは訳が違つてね!」

「でも俺、今は空きなんだー。」

「何ですと?」

「ほり、”倫理学休講”ね?」

携帯を突き出して今日の休講予定をあたしに見せてくる」こと。

あ、クソ、マジだ。

毎日毎日飽きもせず事務室に通つてくるこの男、顔がよければ頭もいい。

ついでに、体もよければ人当たりもいっていいね。

久留米航太、二十二歳。

またの名を『イラつくほどの美人』。

…カツ『いいとかじやない、男前とかでもない。

男なのに『美人』なのだ。

神様、不公平じゃあないでしょつかね？

「だからせ、あかりさんもうすぐお昼でしょ？一緒に食べよつよ。」

「ね？」と上田遣いでおねだり攻撃を仕掛けてくる。

ヤメロ！

マジで！

そのエフェクトは外せんのか！

「ああ、いいですよ真壁さん。久留米くんも待つてるみたいですし

ね。」

ああ事務長（男）！
何、エフェクトと顔にほだされたんですか！

「やつたー！あつがとう、事務長さよ。」

にっこりと事務長に笑顔を向けた航太を見て、ほつ…と感嘆を漏らすその他大勢。

ちょつとちょつと…

あたしはこいつのせいだ、仕事が進まないんだってば！

「いえ、遠慮し…あああああ、遠慮するつづてんじやんかあああ
あ…」

「行こう行こう、あかつさん。」

あたしの言葉は誰に聞き入れられることなく、半ば引き摺られるよう、航太によつて連れ出された。

この、クソガキヤー！

ああ、周りの同僚達の温い視線が痛い…。

「何食べたい？」

「…何でも。」

「じゃあ、俺あかりさんを…」

「却下じゃバカたれが！」

「どうでもいいけど、あかりさんで言葉おかしことあるよなー。」

…「ひめこ」わ！

真壁あかり、二十六歳。
とある大学事務員です。

何故か毎日『美人』がやつてきては、仕事を妨害してこきます。

神様、人に一物以上をお与えになるのは、やめた方がいいと思いま
す。

大事なんです。

カタカタとパソコン画面に向かうあたしの顔は、きっと、出来る女そのものに違いない。

違いない！

そうに違いないわ！

「真壁くん、その…」

「何ですか。」

おやおやおやおやといった感じで話しつけてきた事務長に振り向かせらず、手も止めず、短く応える。

今いいとこなんです。

邪魔ならしないでくださいませんかね。

「それはその…いいのかね？」

「何がですか。」

「何つて、その、うーん…。」

言葉を濁す事務長の言いたいことはわかる。

わかるけども。

今しかない！

今しかないんですよ！

わかつてくださいよ、事務長！

「大丈夫です、今日の仕事は終わっていますから。」

「そ、そ、うかね。そ、そ、はいいんだ、だ、だ、け、ね、真、壁、く、ん、。」

事務長、つるせいな。

そつ思つて振り向こいつとした、

そのとや。

「でもねーあかりさん。それ、個人情報だよ。」

のしつと背中に感じた重みと体温。

華奢に見えて、やつぱり男なんだなあとかうつかり思わせるそれ。

出た！

予定より早い！

「…離れてくれないかね、久留米くん。」

「久留米くんだなんて、やだなー。航太って呼んでくれていいの。」

「

「呼ばんわーはーなーれーるーー。」

事務長そつちのけで、あきゃあきゃあと藻搔くあたし。

久留米航太の腕はあたしの肩に回されたまま、それでも離れることはなかった。

「何でーるのやーー。今はまだ講義中な筈でしょ、うがー。」

自由のあく右手で、ずばりとパソコン画面を指した。

そひ。

あたしはこいつのしつつこいつベタつきとお誘いから逃れるために、こいつのスケジュール一覧を作成してるとこだったのだ。

「言ひとくナビデータベースに侵入した訳でも、あなたの手帳盗んだ訳でもないかんねー！」

尾行といつ正規の手段により手に入れた情報なんだから！文句は言わせねえ！

「あ、そつか…なら、いいんだけどね。」

そんなことを漏らしてから事務長がほつとしたけど。

今はそれどこりじやない。

腕を剥がすのに躍起になつていれば、むかつくほどに綺麗な指が、むかつくほどに綺麗な笑顔で、

ぱちっと、

パソコンの電源を、切つた。

切つた…

…切つた？

「なああああ…? ? ? ? ?」

「今の講義ね、小テスト終わつたらあがりだつたんだよな。」

「聞いてねえよ…」

「そんな」とは聞いてない！

あんた今、あんた今、何しやがつたんだー！…！…！…！

「それも聞いたじゃん。」

「あああああ… あたしの、あたしの努力の結晶が…」

がつくりとうなだれたあたしの耳元で、むかつく美人が、甘く甘く囁きを零した。

「... そんなに俺のこと束縛したいの？」

ああ、
神様。

「あ、あかりさんもう仕事終わったんでしょ?」『飯でも食べに行こう。

L

どうしてこんな。

「それからせ、あかりさんの」と食べて……

「いい訳あるかー！ー！ー！ー！」

アッパー・カットを繰り出すも、難なくそれは躱されて。

「 まあ行こうつーすげ行こうつー 」

「 やだあああああー 」

またもや引きずられるように荷物ごと抱えられたあたしが、奴から逃げ切れたのは。

結局、ご飯を食べた後だった。

「 可愛いなー、あかりさんってば。 」

走って逃げたあたしは、奴がそう言つてへへへす笑つていたことなんて、もちろん知らない。

喜んだんです。

さてさて。

大学はもうすぐ夏期休暇、いわゆる夏休みに入る訳で。

「嬉しい！嬉しい！ちょお嬉しいです事務長！」

「や、そうかね。」

若干引き気味の事務長相手に、あたしは、ガツツポーズでそう宣つていた。

そうは言つても。

あたし達は一ヶ月近く丸々休みがある訳じゃない。

後期からの講義申請やその他に備えて、それなりに仕事はあつたりする。

あ、講堂の掃除の手配とかなきやな。

夏期の資格講座のスケジュールも作つておかない。

ある意味、いろいろなことに追い込み作業はあるものの、それでも緩む口元は隠せなかつた。
何故ならば。

「あつかりさん。」

ばたーんっと事務室のドアを勢いよく開けて乗り込んできた美人があたしの元へと、一直線に駆けてくる。

だって、
だって、

夏休みとなれば。

「こいつがいないんですよ、事務長ー。」

「ああ、そうこいつ」と。

聞いてもいらない事務長に笑顔満面でそいつ言えば、納得したのか、事務長は苦笑でそう返した。

「何の話？」

「うふふふふ。」

「気持ち悪いよ、あかりさん。」

うつせいや！

何とでも言つがよろしい！

今日のあたしは挫けない！

強い子元気な真壁あかりですから！

「強い子元気つて。」

「モノローグ読まれたって平氣だもんね！」

「それ、グリゴだよね？」

「ちょっと聞いてんの？」

がつと奴の襟首を掴んでがつくんがつくん揺らじしてやる。
教えてやる、教えてやるとモロの朗報を！

「もうすくべー夏休みだからー！あんたとー会わんで！済むんだー！ヤッホー！」

「テンション高いねー、あかりさん。」

天高く拳を突き上げたあたしと、揺さ振られながらもモロモロして
るここつ。
どちらにかは知らないが、微妙に温い視線が、間違いなく注がれて
いた。

「ナビねーあかつさん。」

「のとあのあたしよ。」

「盛り上がりつてるとこ悪いけど、」

まだ、

「…何よ?」

まだ、

「…言いにくいくらいだがね、真壁くん。」

「…何ですか事務長。」

まだ、知らなかつた。

明後日の方向を向いた事務長が、申し訳なさげに告げた真実を。

「実はその…久留米くんのとこのサークルがね、夏休みに旅行に行くんだが…。」

「行けばいいじゃないですか。」

「あかりさんも行くんだよ。」

……はい？

え、何で？

奴の襟首をひつ 捄んだまま、ぽかーんと事務長を見詰めること数秒。

「大学の宿舎の食堂係が辞めちゃってね、学長がよろしく頼むつてうちに言つてきたんだが……」

つまり。

そうは言われても、事務室職員は皆既婚者で。
スケジュールの都合上、たまたま空いてたあたしに白羽の矢が立つ
ちゃつた訳で。

しかも。

そのサークルとやらにこいつがつっかりいたりしちゃつた訳で。

「…………マジでか。」

「マジだよ。」

「……すまんね。」

明後日を向いたままの事務長のつるっぺげに田を詰め、あたしは密

かに、涙を飲んだ。

「楽しみだよねー。」

「…そうだね…。」

がくりとうなだれたあたしの横は、対照的にキラキラエフェクトで眩しく。

また、涙が出た。

お母さん！

あなたの娘は、何だか泥沼ですよー！

御免なんです。

青い海、白い雲、眩しい太陽に…

「……はあ。」

溜め息混じりなあたし。

そう、来てしました。

むかつくほどの美人率いる『恐怖の夏合宿』に！

ああ、日差しに倒れてしまいたい。

そして救急車で運ばれて、熱中症だからすぐ帰宅しなさいとかドクターストップ掛けかって、わだかまりもないままに『それじゃあ仕方ないよね』的な空氣で意氣揚々とこの場を去れるのに…

「まだそんなこと言つてるのは、あかりさん。」

出た。

「言つてませんが。」

「モノローグで。」

だから、お前はエスパーか。

「毎回読まないでよ、プライバシー侵害しまくりだよそれ。」

「だだ漏れなんだもん。」

卷之二

あたしは極力関わりたくないから自力で行くと言ったのに、無理矢理サークルメンバーの車に押し込まれた挙げ句、ちゃつかり隣に座りやがって、根掘り葉掘り根掘り葉掘り…

「お前は何なんだ！」

「まあまあ。」

何がまあまあなのか！

何が！！・！・！・！

いつものJRC、JRCのHFKで倒れたらいいのに、あたし。

「……はあ。」

「溜め息尽くとしあわせ逃げるよ。」

「…もう逃げてる。」

あんたの所為で。

見上げた空はやつぱり青く、少しだけ、これからに涙した。

「何あいつ。」

「航太にべたべたしちゃって。」

冷たい視線と大いなる誤解には、まだ、気付くことなく。

500万が498万になつちゃうかどいいの？（前書き）

会話の応酬だらけです。
文とは言えない小話シリーズ。

500万が498万になつちゃうかどこの?

だいちゃん「500万かーどうやつかなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん!」

だ「おーヒロシ、お前何やつてんの?」

ヒ「生きてんの」

だ「知つてるから。そりじゃなくて。……働いてんの?」

ヒ「働いてるよーバイトで!」

だ「バイトつて」

ヒ「結構きつきつだけど」

だ「月いくら?」

ヒ「5万!」

だ「5万で (・・・)」

ヒ「結構大変なんだぜー時給850円だしねー」

だ「850円で (・・・)」

高校生並みの時給なヒロシ。

だ「……いくらかやろつか? (ちょっと可哀相になつた)」

ヒ「え、何で何で何で!?

だ「いや何かわ、急に仕事 (だいちゃんは大学生でヨーネ系の仕事も自分でやつてゐ) で儲かつちゃつて、500万あるんだ」

だいちゃんはいい人。

ヒ「えーいよ……悪こじやん

でも期待するヒロシ。

だ「んー (あんましやつてもこいつのためになんないか?) ……取り敢えず2万でい?」

ヒ「2万!?

だ「うん」

ヒ「500万から2万もやつちやつたら498万になつちやうじゅ

ん！何かキリ悪いけどいいの！？

でもヨーロッパ。シ

だ「貰うのかよ」

ヒー わー 2万も貰つちやつた……………わー」

た・足しにしよ（生活費の）」

ヒロシは実家住まい。

ヒ「うんー、ジ
リ履行くね！」

だから、生活費の足しにしろって」

「お土産はジジのぬいぐるみでいい?」

聞いてないヒロシ。

だ「いやだから……。てか、お前どうしてバイトしてんの?」

ヒ「テイリーヤマキ」

今どきなかなか見ない。

(ある意味レア)

ヒ「もうすぐ春だからさー楽しみにいっぱいだなー」

だ「楽しみ?……まあ、いいけど。ちゃんと(生活費の)足しにし
るよ」

だから、ヒロシは実家住まい。

しづらしくして。

だいちゃんの友人「あ、だいーー！」

だ「おう、どした?」

友人「この間さ、ジリ展示でヒロシ見たぜ。ジジのぬいぐるみ買つ
てたけど」

だ「……」

ママ キも春です。

だこちゃん「もうすっかり春だなー」

ヒロシ「あ、だこちゃんー！」

だ「おー、ヒロシ。ヒロシのへんべー」

ヒ「バイト先ー。」

だ「バイトじゃなくー。」

ヒ「バイトは終わって帰つて来たんだけど、超重要なもの忘れたのー！」

だ「超重要なもの？」

ヒ「バイト先結構かかるんだけどー、やっぱ、超重要なものだからー！」

だ「だからそれ何だよ！」

ヒ「春のパン祭りでしょ？」

だ「『でしょ？』って言われても」

確かに。

ヒ「だーかーらーーーまつみ（松た子のじりじり）が毎年ひ
みしてんじゅんー春のパン祭りだよー。」

だ「（ああ、あれね）……それがどうしたんだよ。ああ、バイト先
ディリーヤマ キだつけ？ フェアだから何か頼まれたとか？（何だ、
ちゅんと仕事やつてんのか……）」

ちょっとヒロシを見直すだいちゅん。

が。

ヒ「違つよーだーちゅん「違つのかよー」俺あれ集めてんの！ ポイ
ントシール貼つた紙、バイト先に忘れちゅつたのー。」

ヒロシ大慌て。

だ「ポイントついて……わざわざ買つてんの？（食パンを）」

ヒ「前でセーバイト中シールはがして貼つてんの話にびれひつ
て。怒られたー。」

だ「はがすなよ」

それは怒られる。

ヒ「あ、急がないとだつたー。」

だ「そんな慌てなくて。明日でもここにじゅん、もつまーせ」

ヒロシのバイトは主に田舎。

（朝は起きられない）

ヒ「だめだよ！夜バイトのやつらも集めてんの。取られたら大変だもん。」

だ「誰だよひへりごへり」

確かに。

ヒ「あつべさせあつべだよー。春のパン祭りは危険（？）がこいつぱいなんだよー。」

だ「危険が？春のパン祭りにっやマ キ春のパン祭りにっ？」

ヒ「じゃーねー。急がないと、バイト先まで30分かーかーるーかーりーーー。」

だ「遠つ（・・・）」

だっこせんに見送られて、ヒロシは自転車で颶麿と去つていった。

だ「……春だなあ」

春ですね。

おはせど、それはおまごんですよ

道でばつたり。

? 「あらーだこちゃんじやないー久しふりねーーー」

だこちゃん「あ、ヒロシのおはせど。お久しふりです」

まさかのヒロシの登場。

だ「ヒロシせー。」

ヒロシ「バイトよバイトー。トイワーヤマ キー。」

だ「（まだやつてゐるんだ）……頑張つてますね」

ヒロシ「もうねーここの歳してからいつてーまこひきやうわーー（やの翻りに明るいこ）」

ヒロシ母は根明。

（ヒロシとある意味そつくつ）

ヒロシ「あ、ちよつと待つて、待つててだこちゃんー。」

だ「はあ……」

待つこと30分。

だ「はあ、まあ、だいぶ」

ヒロシと激似な母。

だ「まあいいんですけど（慣れてる）何持つてきたんですか？」

「母、これねーだいちゃんにあげるわー」うう、いっぽいあつてねー

だ「おばさん声でかこつすね」

ヒ母・やあたあーたいたちやんでは!おはなぐ照れなやうれー!(二)

L

七八二二一

だ「そつすか（やつぱり慣れてゐる）」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだナビ」

だ「えつ（・・・）」

これが尊のと思つただいちゃん。

だ「い、いいんですか？ 確か、ヒロシがすつじい集めてるつて……（てか、いらない……）」

ヒ母「いーいーのーーーあのナ毎年毎年貰つてきて、わざわざひいあるんだからー。」

だ「いっぴつて……

ヒ母「50枚くらー？」

だ「あり過ぎ（・・・）」

ヒ母「どうしょー？ 貰つて貰つてー…だいたやんほら、一人暮らしだつて聞いたしねー。」

春のパン祭りボウルが、何かの足しになるのかは謎。

ヒ母「ね？」

だ「は、はあ……」

だいじやん、押しに負ける。

じめいへじこじ。

ヒロシ「あ……」

だ「み、ヒロシ。……どうした? 元気ないな(バイ)トびになつたとか?」

憔悴のヒロシ。

ヒ「実はさ、3年前の春のパン祭りでまつさん(松た子)がCで使つてたのと同じ型のボウルが、どうかいひやつて……はある」「もつと別のことで落ち込みよ」

ヒ「だつてだつてーあれ、シール30枚必要でーなかなか貯まらないで、俺、かなり苦戦したのにー……あ

ため息が止まらないヒロシ。

だ「そのボウルだつて、きっとどつかにあ……」

「・・・()

ヒ母「はこつー。」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけ」

回想終了

だ「あれか

ヒ「え?」

だ「いや、何でもない何でも」

ヒ「やつは、あ俺、バイト行くから……まあ

心なしか、自転車もゆづくらなヒロシ。

それを見送るだいちゃん。

だ「やばいな、ヒロシの隣座ぶり、尋常じゃなん……」

ヒ母「あらーだーちやんー！」

だ「あ、おはさんーあの、この間のボウルなんですねー」

ヒ母「あらー氣に入つてくれたー！？じゃ、ちょっと待つてー！また持つてくれるか」それはまずいんですよ「何で？（やめとん）」

だ「何でもです。ヒロシが激瘦せします」

ヒ母「やあだーだいやんてば超 意味わっかんなーーー！」

だ「ねばね、若いのはいいんですけどとにかく春のパン祭りシリー^ズはダメです。門外不出でお願いします」

ヒ母「えー

だ「えーじゃないです

ヒ母「50枚あるの」と

だ「あり過ぎですがダメですか

ヒ母「えー

えーと言つたヒロシ母の気持ちもわかる。

後日、だいちゃんはそっとヒロシ母に3年前の春のパン祭りでまつりんがCMで使つてたといふボウルを返却。

ヒロシは、

ヒ「あ、だいちゃん!」

だ「ヒロシ……（絶句）」

ヒ「あ、ばれたー? 悩みがなくなつてね、そしたらたくさん食べちゃつてー」

太つていた。

マネージャー（専書）

所謂マナー。

だこひやん「あつついなー」

ちつちつ。

ヒロシ「あ、だこひやーん。」

だ「めいへ、ヒロシ……」わあ瘦せる

ヒ「あ、つ、え?」

だ「え?じやないえ?じや。それはない」

マヨネーズ手こ搾場のヒロシ。
どこんと温えてこん。

だ「お前を……夏バテとかないの? (なあうださぞ)
だ「やつぱつないんだ……」

ヒ「なー。」

妙に納得。

しかも、自転車の前カゴにはマヨネーズ常備（未開封）。

だ「(悪くなつそうだな)……で、アリスのへ行への?」

「バイト！」

だマヨネーズ乗せて!?

遂に奇行に走ったヒロシを心配そうに見つめるだいちゃん。
それは常であるとまだ認めたくないだいちゃん。

だ「おー、お前……」

ヒ「あ、やつばーい！急がないとバイト遅れちゃうからー。」

だ
あ、
おい、

「二つあるから、だこちゃん」もあさねー。」

(未開封) マヨネーズを手渡されるだいちゃん。

だ
「
い、
いら
な、
」

ヒ「夜バイトのゆうくんと流行ってんのー! ちゅ

つ
！
じ
や

「あねーー！」

颯爽と、しかし、心なしか前よりはあはあ言いながら去つていくヒロシを見送りながら。

だ「……マヨネーズ嫌いなのに」

（未開封）マヨネーズに、うつかり本音を零していただいちやんでした。

そしてヒロシは。

ヒ「最近体が重いなー」

気づいていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180z/>

妄想ウサギSIDE

2011年11月30日22時47分発行